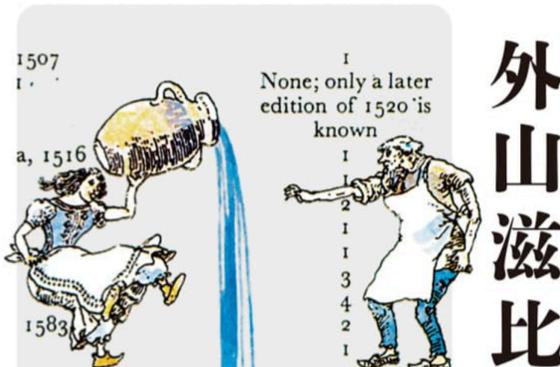


<ロングセラー> AI時代だからこそ読まれるべき、永遠に通用する人間の頭の使い方

新版



外山滋比古の整理学

北海道大、弘前大、岩手大、東北大、秋田大、山形大、福島大、茨城大、宇都宮大、群馬大、埼玉大、千葉大、横浜国立大、新潟大、富山大、金沢大、福井大、信州大、岐阜大、静岡大、名古屋大、三重大、滋賀大、大阪大、神戸大、奈良女子大、島根大、岡山山、広島大、山口大、徳島大、愛媛大、高知大、九州大、佐賀大、長崎大、熊本大、大分大、鹿児島大、琉球大 累計が可能となった2002年8月～2025年7月の各大学生協累計販売冊数【文庫部門】(大学生協事業連合調べ)

全国44の大学で1位

累計 300万部突破

ちくま文庫

四半世紀、知の最先端で読まれ続けている不朽の名著

1983年発売 現在300万部 戦後を代表するロングセラー

1983年刊行の知的生産のための頭の使い方本。人間の頭は、そもそもどう考えるようにできているのか

考えるとは何か、知識をどう活かすかを軽やかに示されている。大学教育やビジネスの現場でも愛読され、現代の思考法ブームの源流とも。

中心となる考え①寝かせる・熟成させる

アイデアはすぐに結論を出そうとすると貧しくなり、寝かせる・熟成させる時間が必要だということ。人間の頭は常に満杯になりがちで、むしろ忘れてたりして“空白”をつくることで発想が生まれる。客観的事実より、自力の論理駕重視。AIは忘れない、寝かせない、客観性、即時性、確率の高さ、が持ち味

中心となる考え②ノートは忘れるためにとる

記憶を頭の外に逃がして、頭は本来である「考えること」に専念できる。何を問題として立てるか、どの違和感を大事にするか、どの問いをあえて放置するかは、人間にしかできない。

今も読まれる戦後を代表するベストセラー

300万部超の戦後のロングセラーランキング4位であり、発売以来40年以上、ほぼ毎年安定して売れ続けている。大学新生・社会人・研究者へと世代を超えて読み継がれている。

著者略歴 とやま しげひろ (1923-2020) : 日本の英文学者・評論家・エッセイストとして長く活躍した知の探究者です。愛知県に生まれ、東京文理科大学英文科を卒業後、英詩や修辞学を中心に研究を深めました。東京教育大学助教授、筑波大学教授を歴任し、教育者としても「自ら考える力」を育てる姿勢を貫いたことで知られています。大学改革期における新しい学問のあり方にも関心を寄せ、学際的な視点を積極的に取り入れました。また、雑誌編集者としても活動し、言語・文化・教育に関する随筆を多数発表。日常の中に潜む知的のヒントを軽やかにすくい上げる文体は多くの読者に親しまれました。鋭い観察眼と柔らかな語り口を併せ持ち、学問と生活をつなぐ独自の思索を展開した外山は、日本の知的風土に大きな影響を与えた存在です。